

國學院大學學術情報リポジトリ「K-RAIN」

「祭礼絵巻にみる日本のこころ」：
國學院大學学びへの誘い

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-07-04 キーワード: 386.1, 721.2, FREE : 展示会カタログ テンジカイカタログ//K 作成者: 加瀬, 直弥, 大東, 敬明, 吉永, 博彰 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000711

祭礼絵巻にみる

日本のいこころ



目次

はじめに	多様な日本の祭礼	1
祭礼の成り立ち	祭礼における行事の意義	2
平安貴族ゆかりの祭礼	行列と絵画	3
賀茂祭(葵祭)の祭儀	賀茂祭の行列	4
無病息災を願う祭礼	祇園祭	5

江戸時代の祭礼	東照宮の神輿行列の特色	11
國學院大學所蔵の祭礼絵巻	山鉾	8
	祓	10
日本各地の祭礼行列		13
主な展示品に関連する祭礼行事(現代)		14

國學院大學「学びへの誘い」

國學院大學が所有する学術資産の内から、古典籍を中心に展示会を開催し、開催地域との文化的な融合を図ることを目的として平成十七年より実施しています。

「学び」とは、学生のみならず、誰もが生涯を通して行う行為であり、切り口を変えることにより、新しい発見が生まれ、様々なものが見えてきます。

多彩な入口を提供し、学術の裾野を広げようとする試みが「学びへの誘い」です。

開催要項

平成二十五年度

「祭礼絵巻にみる日本のこころ」

会期・会場
札幌：六月八日(土)～十六日(日) 紀伊國屋書店 札幌本店 二階ギャラリー
滝川：六月十七日(月)～二十三日(日) 國學院大學北海道短期大学部
東京：七月十三日(土)～二十七日(土) 國學院大學渋谷キャンパス 國學院大學博物館
新潟：九月七日(土)～十六日(月・祝) 新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」多目的スペース
松本：九月二十一日(土)～二十九日(日) 松本市時計博物館 三階企画展示室

はじめに

多様な日本の祭礼

昔から日本の人々は、自然の災いなどを恐れつつもその克服に心を尽くし、稲などの実りを喜びながらも一層の豊かさを求めました。こうした営みに一丸となった、人々の支えとなってきたのが神々への祭礼です。古代より神は、災いをなくし、福をもたらしとされました。今なお、災いよけ、豊かさの祈願、いずれのためにも祭礼は行なわれます。さらに、被害の予防や、豊作への感謝も、祭礼の願いに込められます。祈る神々もさまざまです。この多様さが、日本の祭礼の特色といえましょう。

「社を掃ひて神を敬はば、

災ひを銷し福を致す」

『日本書紀』を始めとする、六国史の記事を部類分けした書物に『類聚国史』があります。冒頭に掲げた文言は、そこにあるものです。元は六国史の『日本後紀』の延暦十七年（七九八）の記事ですが、その部分は現存しません。祭礼の場を整え、神を敬えば、神は災いを消滅させ福をもたらす、という意味です。

この文言からは、祭礼が吉凶いずれにも対応していた事実を理解できませんが、祭礼の成就には、掃除に代表されるような怠りない準備と、神を敬う気持ちが必要なことも物語っています。

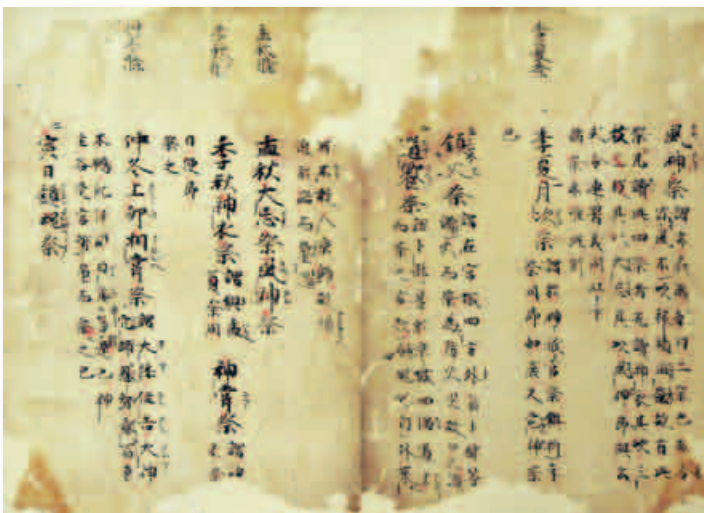
（関連典籍）『令義解』巻三 猪熊本

一軸、鎌倉時代写、國學院大學図書館蔵、

重要文化財

『令義解』とは古代の法令、養老令の注釈書で、天長十年（八三三）の成立です。同令で朝廷祭祀の関係事項を定めた神祇令には、一年の間に行なう祭礼が定められています。ここから、古代より、農耕祭祀を中心に、多様な願いを込めた祭礼が行なわれていたことが分かります。

元は明法の家である坂上家に伝わっていたもので、有職故実に通じた猪熊信男氏を経て、現在國學院大學が所蔵しています。



祭礼における行事の意義

古代の歴史書『古事記』『日本書紀』からは、当時の祭礼の姿が推し量れます。石窟に籠もり、世界を闇に閉ざした天照大神を外に出し、明るさを取り戻すために行なわれた、いわゆる天石窟戸の神事もその一例です。その際、天鈿女命による俳優、つまり演芸が、願いを叶える上で大きな役割を果たしました。この俳優が、石窟の外の神々を大いに沸き立たせ、天照大神の関心を外に向けたのです。祭礼では、神に願いを届けるためにも、また、参加者の意識を高める上でも、祈り以外の行事が重要な意味を持つことがあるのです。

天石窟戸の神事

ここでは『日本書紀』巻一(神代上)七段の本文にできるだけ即して概略を紹介します。

弟である素戔嗚尊すさのおのみことの無礼により負傷した天照大神は、立腹して石窟に籠り、世界は闇に包まれます。このため八十万の神は、思兼神おもいかたのみかみの構想のもと、神事の準備をします。まず、長鳴鳥ながをとりを鳴かせながら、石窟の戸に手力雄神たぢからのおのみかみを控えさせます。天兒屋命あまこやのみことと太玉命たまたまのみことは、天香山あまのかくやまの五百箇真坂樹いおつのみささきの枝に玉・鏡・幣ぬさ(布)を懸けて祈禱します。そして、天鈿女命あまのすめのみことが俳優と神懸かりをします。この一連の所為が天石窟戸の神事といわれます。

石窟の天照大神は、「私が石窟にいるのになぜ楽しんでるのだらう」といい、その戸を細く開け、様子をうかがいます。そこで手力雄神が大神の手を引き石窟から出し、天兒屋命と太玉命が石窟に繩をかけました。その後、素戔嗚尊は罪を贖あがなわさせられ、天から放逐されました。

下の写真は『伊勢参宮名所図会』巻五上(寛政九年(一七九七)刊、國學院大學神道資料館蔵)です。この神事の様子が描かれています。



① 『日本書紀』 卷一 二嶋本

一軸 正長元年(二四二八)、良海等写
國學院大學図書館蔵 旧重要美術品

養老四年(七二〇)成立で、現存する日本の歴史書としては『古事記』に次ぐ古さです。神の時代のことは諸説を併記していますが、天石窟戸の神事は主説として大字の本文に載っています。

展示品は、書写者が伊豆三嶋社参籠の際、神代紀・神武天皇紀(卷一〜三)を写し奉納したものです。國學院大學は卷一と卷三のそれぞれ一部を所蔵しており、奉納先の三嶋大社(静岡県)所蔵本と合わせると三巻全て揃います。國學院大學は、本来の体裁に復元した影印本を、昭和五十七年(一九八二)に刊行しています。



祭礼の成り立ち

行列と絵画

祭礼の多くは神社の神に対するものです。しかし、祭礼を構成する祭儀・行事の場は、人の生活と隔たる神社内を基本とするため、祭礼を体感する人々は限られます。しかし、神霊を奉る神興みこしとその随行者、あるいは、神社内の祭儀に向かう参加者などによる、神社の外で主に組まれる行列は違います。行列に参加する人々は、その違いを意識し最善を求めました。結果、行列は人々の注目を集め、絵画の題材にもなりました。『年中行事絵巻』など、記録目的の絵巻は中世からあり、近世には、鑑賞のため屏風などにも描かれました。

賀茂祭(葵祭)の祭儀

賀茂御祖神社(下鴨神社)・賀茂別雷神社(上賀茂神社)の賀茂祭は、京都の初夏を代表する祭礼です。欽明天皇の時代(五三九〜五七二)、風雨の災いを防ぐため始まったとされます。平安京への遷都直後からは、天皇が祭神に幣帛という品を用意し、神社でそれを祭使(勅使)が奉る、四月二番目の酉の日の祭儀が祭礼の軸となりました。賀茂祭関連の祭礼としては、賀茂御祖神社の御蔭祭、賀茂別雷神社の御阿礼神事も重要です。各々の祭神が表われたとされる御蔭山・神山から神霊を神社まで遷します。古い祭礼の姿を留めると考えられています。

② 『賀茂註進雜記』 上下

一冊 延宝八年(一六八〇)頃、山本季村筆
國學院大學図書館蔵



賀茂別雷神社の由緒や祭礼などを、八部門に分け集めた記録です。江戸幕府寺社奉行の意向により、延宝八年に神職の岡本保可などが編集しました。筆者の山本季村もそれに関わっています。賀茂祭の記述は総じ

て詳細ですが、秘儀である四月二番目の午の日の御阿礼神事は、年中行事の一覧の中で簡単に触れられているだけです。

展示品は、江戸末期の商人で国学を学んだ小津久足の西荘文庫にありました。

③ 『賀茂御蔭祭図絵巻』

一軸 紙本着色 安永六年(一七七七)
松村藤連香画 國學院大學神道資料館蔵

江戸以前、御生神事とも呼ばれていた御蔭祭は、天皇の祭使による奉幣の三日前に、御蔭山から賀茂御祖社に神霊を遷すための祭礼でした。絵巻は祭礼の終盤、神社境内の森で芸能を行なう切芝神事を終え、本社に神霊が向かう場面を描いています。神霊は馬に載せられ、絹蓋という傘で覆わ

れています。

展示品は制作当時神職であった泉亭俊春の所持する絵巻を写したとされます。



賀茂祭の行列

平安時代、賀茂祭で天皇の幣帛を奉る祭使一行にとっては、神社での祭儀だけでなく、その行き帰りも重要でした。祭使一行は天皇の御所である内裏で儀式を行なった上で、行列を組んだのです。この行列には、神に仕える皇女の齋王も加わります。これは、当時の京でも賀茂祭だけのことで、行列の権威を高めました。多くの人々が行列を見物したのは必然といえましょう。貴族も例外ではありません。行列の通る道には牛車が連なり、仮設の棧敷まで設けられました。その様子は、貴族の日記にも、文学作品にも残されています。

④ 『源氏物語』 葵巻 久我家本

一帖 江戸時代初期写 國學院大學図書館蔵

この帖には、賀茂祭の行列見物の場が舞台となる話があります。賀茂祭に参る齋王は、事前に鴨川で御禊(禊)をします。光源氏の正妻葵上と六条御息所は、この行列観覧の際に車争いをします。また、壮齡の源典侍の好意に源氏が呆れたのは、神社に幣帛を奉る祭使の行列を見ようとした時です。

展示品は村上源氏の流れを引く公家の久我家で作られたもので、『源氏物語』五十四帖が揃っています。鎌倉時代の歌人、藤原定家が集成した青表紙本の系統に属します。絵が各帖の冒頭にある珍しい体裁で、専用の収納箱も現存します。

⑤ 『賀茂祭草子』

一軸 紙本着色 制作年代不詳(江戸時代後期か) 國學院大學図書館蔵



賀茂祭の祭使の行列が、内裏より賀茂社に向かう様子を描いた図です。行列を棧敷から見物する

貴族や、庶民の姿もあ
ります。

絵のもととなったのは文永十一年(二七四)の行列です。『賀茂祭絵詞』と通称される絵巻の一本で、展示品は鎌倉時代の様子を忠実に描く系統のもので、す。天地の朱界の外に、『江次第』『山槐記』など、平安期の儀式書や日記の記述が注記されているのは、展示品の特徴です。





〔関連絵巻〕『葵祭絵巻』

一軸 紙本着色 制作年代不詳(江戸時代後期か)
 國學院大學図書館蔵



系統は『賀茂祭草子』『文永賀茂祭図』と同じです。
 彩色の省略箇所があります。國學院大學で教鞭を取った武田祐吉たけだゆうきちの旧蔵品です。

『賀茂祭絵詞』の一本です。同絵詞には、鎌倉時代の様子を留めて描かれたものと、近世初期の身なりを参考にしたものとに分かれますが、展示品は『賀茂祭草子』と同じく前者です。尾部の奥書おくには、中世以来中断していた賀茂祭が復興した元禄七年に、五撰家ごせんけである鷹司家の所蔵本を元にして描かれたとの記述があります。ここから、展示品は京都産業大学(京都府)や神宮文庫(三重県)の所蔵品と同一系統であることが分かります。

⑥ 『文永加茂祭図』

一軸 紙本着色 元禄七年(一六九四)以降、
 高階定信画 國學院大學図書館蔵

⑦ 『葵祭図屏風』

六曲一双 紙本着色 江戸時代後期、
 西村楠亭画 國學院大學神道資料館蔵

賀茂祭の祭使の行列が描かれています。屏風を横に貫く川は鴨川とみられます。屏風左隻の牛車ぎまは飾車と呼ばれ、人は乗りません。右隻右端の駕籠かみしもや袴姿の武士の姿は、江戸時代の行列の特徴を示しています。

作者の西村楠亭は、円山心挙まるやまこきよに師事しました。円山派の画法の特徴である遠近法はこの屏風でも採られており、行列を長く見せたり、川の対岸で見物する人々と行列との区別を際立たせたりする工夫がなされています。



無病息災を願う祭礼

祇園祭ぎおんまつり

平安時代の中頃、人が多く住む京で恐れられたのは、夏の疫病えびきりょうでした。病をつかさどる素戔鳴尊すそね(牛頭天王ごずてんのう)を祀まつる祇園社では、健康祈願のため御霊会ごりぎえを行ないました。京都の夏の風物詩とされる、八坂神社祇園祭やさかじんじやの始まりです。祇園御霊会の特色は、神社の神霊が、神輿かみこで京の町々を巡るところにあります。疫病への神の力を、人々の身近な場で示してもらったためです。現在、各地の祭礼で神輿行列がありますが、祇園御霊会はそのさきがけです。以後この御霊会は、朝廷も関わる中、京の人々により発展を遂げることになります。

⑧ 『年中行事絵巻』 祇園御霊会

一軸 紙本着色 制作年代不詳(江戸時代後期か) 國學院大學神道資料館蔵

描かれているのは、江戸時代以前は六月十四日に組まれていた祇園御霊会の神輿行列です。絵巻は後白河院が宮中の行事を図示する命を下したのが制作の契機ですので、平安末期の様子を反映した描写と考えられます。神輿かみこや鉾ぼこの他、田楽でんがくや獅子しし、面を付けた舞人まいじんが描かれています。原画は失われ、それを模したとされる善本も、祇園御霊会の箇所は素描であるため、彩色されているのは展示品の特色です。ただし、神輿が三基中一基のみであるなど、一部の描写は略されています。



無病息災を願う祭礼

やまほこ 山鉾

祇園祭では神輿行列が繰り出されますが、京都の市街地を巡る華麗な山鉾の行列も良く知られています。今に伝わる山鉾の形式は、中頃まで確実にさかのぼります。山鉾は鉾と山に分けられますが、鉾は文字通り、装飾された屋台の上にそびえる鉾が特徴で、疫病を起す疫神えきしんを招く役割があるとも考えられています。『年中行事絵巻』に描かれている、手に持たれた鉾もそうした役割があったかもしれません。祇園祭と同時期にはじまった京の上下御霊神社の御霊会でも、大きな鉾が神輿の行列に加わりました。

⑨ 『祇園祭礼絵巻』

一軸 絹本着色 嘉永元年（一八四八）、
冷泉為恭画 國學院大學神道資料館蔵

祇園祭山鉾やまほこ巡行じゆんぎやうの絵巻です。祇園社楼門を冒頭に配し、続いて旧六月七日の先祭さきまつりに繰り出された二十三基の山鉾、十四日の後祭あごまつりに登場する十一基の山鉾が描かれています。制作された嘉永元年当時の姿が元になったとみられますが、文政九年（一八二六）以来休山で、当時巡行じゆんぎやうのなかった鷹山たかやまの姿があります。今は禁止されている、山鉾からの粽ちま投げの様子も描写されています。冷泉為恭は京狩野家出身の絵師で、展示品は青年期の作品です。



⑩ 『稻荷神社・下御霊神社私祭之図』

一軸 紙本着色 明治十年（一八七七）、国井
 応文画 國學院大學神道資料館蔵

上御霊神社・下御霊神社それぞれの神輿行列を描きます。行列に加わる大きな鉾は鉦鉦と呼ばれ、京都の祭礼で良くみられるものです。題の「私祭」とは、明治維新以後、社殿での重要祭儀と神輿行列の行事とに、公私の別が生じたため付いた名称です。元々神輿行列は七・八月でしたが、この頃より五月に変わりました。

作者の国井応文は京出身で、円山応立に師事し、幕末から明治前期にかけて活動していました。



⑪ 『佐賀祭絵巻』

一軸 紙本着色 制作年代不詳（江戸時代後期か） 國學院大學図書館蔵

京都嵐山周辺の初夏の祭礼、嵯峨祭を意識して描いたと考えられる絵巻です。同祭は疫病除けに特化していませんが、鉦鉦が行列に加わることで知られます。現在、愛宕神社と野宮神社に関連する祭礼として、五月に神輿行列が組まれます。

アイルランドのチェスター・ビーティー・ライブラリー所蔵の『嵯峨祭絵巻』と比較すると、共通する練り物はあるものの、神輿の数が少ないなど、異なる点もあります。鉦鉦もありません。



無病息災を願う祭礼

祓はらえ

神社での祈願を「おはらい」とよく呼びます。「おはらい」とは、元は祈願一般を指すのではなく、人の罪を贖う祓という行事に由来することですが、すでに『万葉集』には、祓による延命を願う歌が載っています。この考えは平安時代にも受け継がれ、特に夏の祓は重んじられました。使われる道具も、常に用いられる人形ひとがたなどに加え、夏季特有の菅拔すがぬきも登場します。中世にはさらに疫病よけの茅ちの輪わも使われました。各地の神社でも夏の祓は重要な行事として位置付けられ、大規模な行列を組む祓関連の祭礼もありました。

⑫ 『宇佐御祓図』

一卷 紙本着色 制作年代不詳(江戸時代後期か) 國學院大學図書館蔵

近世以前、豊前(今の大分県)の宇佐八幡宮で六月末に行なわれた、御祓会おほひえ(現在の御神幸祭ごしんこうさい)の神輿みこし行列が描かれています。所役の代表者のみが少数表現され、実際の人数は絵巻下部に付記されています。縄を解く解縄とよみや、振る大麻おほぬまなど、広く用いられる祓の道具の他、夏の祓を代表する、平安時代以来の菅拔すがぬきをみることができます。

展示品は、國學院大學で教鞭をとった神道学者、河野省三こうのせいぞう蔵です。



(関連絵巻) 『宇佐宮御祓会行幸絵巻』

一軸 紙本着色 制作年代不詳(江戸時代後期か)
國學院大學図書館蔵



御祓会に参加する人々が描かれています。『宇佐御祓図』よりも行列を具体的に描いています。

東照宮の神輿行列の特色

江戸幕府を開いた徳川家康は、没した翌年の元和三年（一六一七）、日光（栃木県）の東照宮とうしょうぐうで祀られます。この渡御祭とぎまさいの祭礼行列は現在「百物揃千人武者行列」と呼ばれますが、江戸時代には、神輿に実際の武士が護衛などとして多数付き従いました。將軍主宰のこの祭礼の厳格さがうかがえます。東照宮は各地に創建されました。紀州和歌山にも、家康の十男である紀州藩主徳川頼宣により東照宮が作られ、和歌祭かまつりが行なわれました。この神輿行列には、日光とは対照的に、和歌山城下の町人などによる多彩な練り物ねものが練り出されました。

⑬ 『日光祭礼絵巻』

一軸 紙本着色 制作年代不詳（江戸時代後期か） 國學院大學神道資料館蔵

江戸時代、日光の東照宮の祭礼は徳川家康の命日にあたる四月十七日に行なわれていました。絵巻はその神輿行列を描いています。行列の前後と中間の一部を欠くものの、それ以外の役はきちんとして表現されており、東照大権現とうしょうだいこんげん（家康）・山王さんおう・摩多羅神たたらじんあわせて三基の神輿の部分は、それぞれの特徴を捉えて描き分けられています。ただし、全ての人を描いてはいません。随行武士の鎧やうりなど、一部の参加者の所持品には、それに関連する注記があります。



（関連絵巻）『東照宮祭礼絵巻』

一軸 紙本着色 嘉永四年（一八五一）画
國學院大學神道資料館蔵

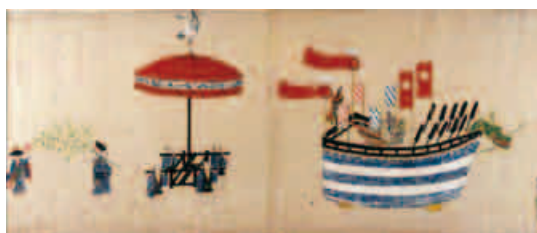


『日光祭礼絵巻』より簡略ですが、神輿の描写は、寛永十二年（一六三五）に作られた実物（現在東照宮宝物館に所蔵）の特徴を捉えています。



(関連絵巻) 『和歌山東照宮御祭礼絵巻』

一軸 制作年代不詳(江戸時代後期か)
 國學院大學神道資料館蔵



餅つき踊りと呼ばれる練り物が描写されている点などから、寛政十二年(一八〇〇)年から文政四年(一八二一)までの和歌祭を描いたものとされています。

⑭ 『和歌浦御祭礼御渡絵巻』
 一軸 紙本着色 江戸時代後期、勝川春英画
 國學院大學図書館蔵

日光と同様、江戸時代には四月十七日に行なわれていた、紀州の東照宮の和歌祭を描いた絵巻です。一軸ですが、下巻の存在を推定できます。冒頭は神輿前での祭儀で、相撲が続きますが、その後は踊りや唐船の山車^{からふねだし}など、練り物の行列となります。和歌祭は寛文五年(一六六五)に規模が縮小し、練り物の数が減りますが、描かれているのは縮小前の様子です。しかし、人の身なりは当時の様子ではありません。勝川春英は浮世絵師としても知られる画人です。

『石清水八幡宮臨時祭復興絵図』

一軸 紙本着色
文化十年(一八一三)以降画
國學院大學図書館蔵

石清水八幡宮(京都府)で行なわれていた古代以来の祭礼が臨時祭です。中世に途絶えますが文化十年三月に復興しました。絵巻にあるのは、京から神社へと向かう人々の行列です。



『香取神宮神幸祭絵巻』

一軸 絹本着色
制作年代不詳(江戸時代か)
國學院大學神道資料館蔵

香取神宮(千葉県)では十二年に一度、四月に大規模な神幸祭を行ないますが、この絵巻はその中世の様子を伝えています。当時は三月の祭礼でした。



『阿蘇宮祭礼絵詞』

一軸 紙本着色
天保四年(一八三三)画
國學院大學図書館蔵

阿蘇神社(熊本県)の御田植祭おたうえまつりの絵巻です。同祭を特色付ける、白い装束を着し、頭に食膳ひつを納めた櫃ひつを抱くうなりの行列がみられます。現在は七月ですが、江戸時代は六月の祭事です。



『津島神社五月五日神幸図』

一軸 紙本着色
制作年代不詳(江戸時代後期か)
國學院大學神道資料館蔵

津島神社(愛知県)で江戸時代、五月五日に行なわれていた祭礼の神輿みこし行列が描かれています。近世以前は、節供の際に大規模な祭礼をする神社が多くありました。



主な展示品に関連する祭礼行事(現代)

展示品	府県名	関連神社名	祭礼名		しきじつ 式日(実施日)
③	京都	賀茂御祖神社(下鴨神社)	賀茂祭 (葵祭)	御蔭祭	5月12日
②		賀茂別雷神社(上賀茂神社)		御阿礼神事	5月12日(非公開)
④⑤ ⑥⑦		賀茂御祖神社 賀茂別雷神社		社頭の儀 (勅使奉幣) <small>ほうへい</small>	5月15日
⑧		八坂神社	祇園祭	じんこうさい 神幸祭(神輿渡御) <small>とぎょ</small>	7月17日
				かんこうさい 還幸祭(同上)	7月24日
				山鉦巡行	7月17日
⑨		御霊神社(上御霊神社)	御霊祭	神幸祭	5月1日
				還幸祭	5月18日
⑩		下御霊神社	神幸祭		5月1日
				還幸祭	5月第3もしくは第4日曜日
⑪	愛宕神社・野宮神社	嵯峨祭	神幸祭	5月第3日曜日	
			還幸祭	5月第4日曜日	
⑫	大分	宇佐神宮	御神幸祭 (御祓会)	はつれん 御発輦祭	7月27日以降最初の金曜日
				御還着祭	御発輦祭の2日後
⑬	栃木	東照宮(日光東照宮)	例大祭	渡御祭	5月18日
⑭	和歌山	東照宮(紀州東照宮)	神輿渡御祭(和歌祭)		5月第2もしくは第3日曜日

※祭礼が長期にわたる場合は一部の祭儀のみ掲載しました。日程は変更される場合があります。

國學院大學学びへの誘い

「祭礼絵巻にみる日本のこころ」

編集 加瀬直弥 編集協力 大東敬明 吉永博彰

平成25年(2013)6月7日 発行

発行 國學院大學

東京都渋谷区東四丁目10番28号

* 國學院大學神道資料館は、研究開発推進機構学術資料センター内の部門名です。